

財団法人 日中医学協会

2010 年度共同研究等助成金報告書－中国人研究者招聘－

2011 年 1 月 4 日

財団法人 日中医学協会 御中

貴財団より助成金を受領して行った中国人研究者招聘について報告いたします。

添付資料：研究報告書

受給者氏名：真部 淳



所属機関名：聖路加国際病院

所属部署名：小児科

職名：医長

所在地：東京都中央区明石町 9-1

電話：03-3541-5151 (代表) 内線：PHS77-223

1. 助成金額：900,000 円

2. 研究テーマ

小児の骨髄異形成症候群 (MDS) の診断と治療

3. 成果の概要

小児の骨髄異形成症候群 (MDS) は、頻度は低いものの、診断が難しく、また予後不良の疾患群である。国内での発症例は1年間に50-100例と少ない。天津の中国医科学院血液学研究所の若手研究者を日本に招き、小児のMDSの診断と治療を学ぶ機会を設けた。場所は聖路加国際病院で、2010年7月から12月までの6ヶ月間である。被招聘者は、日本小児血液学会のMDS委員会が行う中央診断システムを通じて全国から同院小児科に送られてくる標本(毎週約5件)を用いて、小児MDSの診断学を学んだ。また、日本国内で過去10年間に中央診断された約600例について臨床像を整理し、2008年に出されたWHOの新しい疾患分類に照らし合わせて検討を行ったところ、小児MDSについての新たな知見が得られ、現在論文化を進めている。今後は中国においても中央診断を用いた前方視的登録が開始されることを目指す。現在、世界的には中央ヨーロッパ地方および日本から小児MDSの治療研究が提案されているが、その他では行われていない。小児MDSは予後不良疾患であり、多くの症例で骨髄移植が適応であるが、同治療法の晩期障害を考えるとより洗練された治療の開発が必須である。症例数の多い東アジアから共同治療研究が提案されることの意義は大きいであろう。

小児の骨髄異形成症候群（MDS）の診断と治療

研究者氏名：陈 晓娟

中国所属機関：中国医学科学院血液学研究所小児科

日本研究機関：聖路加国際病院小児科

指導責任者：医長 真部 淳

共同研究者名：細谷 亮太

要 旨

小児の骨髄異形成症候群（MDS）は、頻度は低いものの、診断が難しく、また予後不良の疾患群である。国内での発症例は1年間に50-100例と少ない。天津の中国医科学学院血液学研究所の若手研究者を日本に招き、小児のMDSの診断と治療を学ぶ機会を設けた。場所は聖路加国際病院で、2010年7月から12月までの6ヶ月間である。被招聘者は、日本小児血液学会のMDS委員会が行う中央診断システムを通じて全国から同院小児科に送られてくる標本（毎週約5件）を用いて、小児MDSの診断学を学んだ。また同院および名古屋第一赤十字病院や名古屋大学において症例カンファレンスに出席し、小児MDSの診断と治療を学んだ。さらに日本国内で過去10年間に中央診断された約600例について臨床像を整理し、2008年に出されたWHOの新しい疾患分類に照らし合わせて検討を行ったところ、小児MDSについての新たな知見が得られ、現在論文化を進めている。今後は中国においても中央診断を用いた前方視的登録が開始されることを目指す。現在、世界的には中央ヨーロッパ地方および日本から小児MDSの治療研究が提案されているが、その他では行われていない。小児MDSは予後不良疾患であり、多くの症例で骨髄移植が適応であるが、同治療法の晩期障害を考えるとより洗練された治療の開発が必須である。症例数の多い東アジアから共同治療研究が提案されることの意義は大きいであろう。

Key Words

骨髄異形成症候群、MDS、小児、中央診断、国際協力

緒 言：

小児の骨髄異形成症候群（MDS）は、頻度は低いものの、診断が難しく、また予後不良の疾患群である。国内での発症例は1年間に50-100例と少ない。日本小児血液学会のMDS委員会の事業である中央診断を用いた前方視的登録により、国内の症例を把握することは可能となっ

たが、症例数が少ないため、治療方法の確立は容易ではない。中国との共同研究を行うことにより、小児 MDS 診断の標準化ならびに治療研究の推進が可能になると考えられる。

申請者は 2008 年 10 月に天津にある中国医科学学院血液学研究所に 1 週間滞在し、小児血液学者を対象に講義ならびに顕微鏡を用いた講習を行った。残念ながら現段階では中国の研究者は本疾患（小児 MDS）について十分に習熟しているとはいいがたい。そこで、本研究では同研究所の若手研究者を日本に招いて小児 MDS の診断と治療の実際を習得することを目指した。

方法と結果：

天津の中国医科学学院血液学研究所の若手研究者を日本に招き、小児の MDS の診断と治療を学ぶ機会を設けた。場所は聖路加国際病院で、2010年7月から12月までの6ヶ月間である。被招聘者は、日本小児血液学会の MDS 委員会が行う中央診断システムを通じて全国から同院小児科に送られてくる標本（毎週約 5 件）を用いて、小児 MDS の診断学を学んだ。また同院および名古屋第一赤十字病院や名古屋大学において症例カンファレンスに出席し、小児 MDS の診断と治療を学んだ。さらに日本国内で過去 10 年間に中央診断された約 600 例について臨床像を整理し、2008 年に出された WHO の新しい疾患分類に照らし合わせて検討を行ったところ、小児 MDS についての新たな知見が得られ、現在論文文化を進めている。

考 察

将来的には中国においても中央診断を用いた前方視的登録が開始されることを目指す。世界的には中央ヨーロッパ地方および日本から小児 MDS の治療研究が提案されているが、その他では行われていない。小児 MDS は予後不良疾患であり、ほとんどの病型で骨髄移植が適応であるが、同治療法の晩期障害を考えるとさらに洗練された治療の開発が必須である。人口が多く症例数も多い東アジアから共同治療研究が提案されることの意味は大きいと考えられる。

そのためにまず、中国において中央診断を用いた前方視的登録が開始する準備を始める必要がある。具体的には、小児 MDS の診断・病型分類についての合意を形成するとともに、疾患登録に用いるフォームを日本で用いられているものと共通化させる作業を行う。このような作業においては、日本のシステムに習熟している被招聘者が今後中心となって活躍することが期待される。

参考文献

1. 平林真介、真部淳：MDS の中央診断：445 例の追跡調査。日小血会誌 23:53-57, 2009
2. 長谷川大輔、真部淳：小児不応性血球減少症-2010 年における最新の知見。日小血会誌 24:161-167, 2010

3. Kamiya T, Manabe A: Congenital dyserythropoietic anemia. *Int J Hematol* 92:432-438, 2010
4. Hasegawa D, Manabe A, Yagasaki H, Ohtsuka Y, Inoue M, Kikuchi A, Ohara A, Tsuchida M, Kojima S, Nakahata T: Treatment of children with refractory anemia: the Japanese Childhood MDS Study Group Trial (MDS99). *Pediatr Blood Cancer* 53:1011-1015, 2009
5. Manabe A, Okamura J, Yumura-Yagi K, Akiyama Y, Sako M, Uchiyama H, Kojima S, Koike K, Saito T, Nakahata T: Allogeneic hematopoietic stem cell transplantation for 27 children with juvenile myelomonocytic leukemia diagnosed based on the International JMML Working Group. *Leukemia* 16:645-649, 2002
6. Sasaki H, Manabe A, Kojima S, Tsuchida M, Hayashi Y, Ikuta K, Okamura J, Koike K, Ohara A, Ishii E, Komada Y, Hibi S, Nakahata T: Myelodysplastic syndrome in childhood: a retrospective study of 189 patients in Japan. *Leukemia* 15:1713-1720, 2001

作成日 2011年1月 4日